

いっさつのおくりもの

よつば小学校 一年 みやけ みお
このほんをえらんだりゆうは、ままにすすめられて、えをみたら、くまさんときつねさんとりすさんがかわいかったからです。

このほんは、くまたのだいすきなほんをおあめがふってみずびたしになってこまっている、やまのむこうのふかみどりむらのささえさんにふれぜんとをするおはなしです。

くまたは、ほんとうはだいすきなほんをあげたくなかったけれど、ほかのほんはきずやよごれがあり、あげることができなかったんです。あげたあと、よる、ふとんのなかでひとりになると、おもいだしてさびしくなりました。そんなとき、ささえさんからほんのおれいのがみがときました。それをよんだくまたは、あげてよかったとおもいました。

わたしもだいじなぬいぐるみがあります。ねるときもいっしょです。おにちゃんにたまにかしてあげられるけれど、ふれぜんとをすることはできません。なぜなら、とてもさみしいからです。こまっているひとがめのみえにいたら、がんばってあげることができません。でも、やっぱり、さみしいです。だから、くまたはすごいなとおもいました。

たぬきのきょうしつ

八雲小学校 二年 木村 宗祐

ぼくは今、小学二年生です。べん強でわからなくなった時は、べん強がいやになることがあります。でも、知らないことや新しことを知ることは、たのしいです。

だから、たぬきのお父さんが教しつで子だぬきたちにべん強を教えている場面は、ワクワク、たのしい気持ちになりました。

たぬきのお父さんと子どもたちは、広島市、小学校の校内にあるクロガネモチの木の下にすんでいました。この話は、明治六年一月、広島市で原ばくが落とされた時のお話です。ぼくは、この本を読んで、あらためてせんそうはこわいと思いました。はじめてせんそうの話聞いたのは、ぼくが1年生の時です。六年生の方がせんそうのげきを見せてくれたので、原ばくのことを知っていました。ぼくがかよう学校では、先生だけでなく上の学年や友だちもわからないことを教えてくれます。教えてもらうと、少し自信がもてるようになつたり、べんきょうもたのしくなつてきます。ぼくが、この本の中で好きな場面は、たぬきのお父さんが一年生に化けていっしょにじゆきょうを受けるシーンです。お父さんは、こだぬきたちだけに、「べん強しなさい。」と

言うのではなくて、「べん強ってなんておもしろいんだ。」と、毎日休まず、じゆきょうをうけているところが、すごいと思いました。だから、この中に出てくる登場人物の中で、たぬきのお父さんが一番好きです。

もう少しでぼくの学校では、二がつきです。でも、このたぬきが生きた時だいではせんそうで、突然べん強ができなくなりました。ぼくがねがうことは、もうせんそうがおきないたぬきも人も平和にくらせる町です。